

在京白聖會報

創刊号

平成8年11月24日

会報発刊のご挨拶



在京白聖会会長

(昭和二十五年卒)

及川昭伍

在京白聖会は昭和四十四年に創立されました。その前年の昭和四十三年に母校盛岡一高の野球部が甲子園に出場し、在京同窓の有志多数が甲子園に応援に駆けつけたことが契機となって結成されました。

創立総会には百人余が集まりました。この会は、会員相互の親睦だけを目的とし、会長もおかず、会員一人ひとりが会長ということまで発足しました。昭和十七年卒の工藤祐正弁護士に事務所をひきうけていただきました。以後、毎年母校の創立記念日である五月十三日に総会懇親会を開催してきました。

総会は、当初の十年間は上野精養軒で、その後は原宿の東郷記念館で開催してきました。両方とも同窓生が役員をされているご縁でお世話頂いてきました。在京白聖会創立二十周年の平成二年には、二十周年記念誌を発行しました。その後間もなく、事務所とともに事実上の代表幹事を引き受けてこられた工藤弁護士が急逝されました。在京白聖会事務所は平成四年から、昭和四十三年卒の星野健秀弁護士に引き受けていただいていたに至っています。

在京白聖会は年々盛大となり、総会懇親会の出席者も、今年はいよいよ百五十人を超えるようになりました。

た。年会費の納入者八百人、会員名簿登載者二千五百人となりました。若い人たちの参加により、今後ますます増加していくものと見込まれます。会員から会務執行体制の整備の要望が強くなり、規約を改正して、今年から、年次代表幹事、常任幹事、事務局長、会長、副会長というような体制を取ることにしました。あわせて会報を発行し情報交流の緊密化を図ることにしました。

今年の総会で私が会長に選出されました。私たちの年次は、昭和十九年に旧制盛岡中学に入学し、戦後の学制改革により新制高校に移行し六年間白聖の校舎で学びました。盛岡中学と盛岡一高の両方をよく知っている者として指名されたものと考え、非才ですがつとめさせていただきますので、ご協力をお願いします。

今年と同窓の宮沢賢治の生誕百年、石川啄木の百年で郷土も母校も賑わっています。私も八月に帰郷し、秀麗高き岩手山、清流長き北上川で浩然の気を養い、賢治記念館、啄木記念館の新しい展示を見てきました。

在京白聖会の活動、特にこの会報が、青春の学びやを共にした皆さんの、親睦、交流にお役にたつことを心から念願致します。



盛岡一高(盛岡中学)と方言

本堂 寛

言語学者としてアイヌ語研究で著名であった、一般には国語辞典の編集でよく知られている金田一京助博士に最初にお会いしたのは私の高校時代、盛岡一高の体育館であった。後輩である私たち全校生徒を前にして、本当に優しいしぐさと眼差しで、石川啄木との交遊などについて訥々と話してくださった。

この中で、アイヌ語調査についても話されたように思うが定かではない。その後読んだ『心の小径』と記憶が重なってしまったからである。そしてその内容は、私にとって後々強烈な印象が残った。日本人として初めてカラフトアイヌ語調査に渡島した博士に、アイヌの大人たちが心を閉ざしたの対して、純真な子供が最初に言葉を発してくれたというくだりだった。心が純粹なほど、言葉は心を開ききつかけになり、人と人とを結ぶかけがえのない手がかりになるということだった。

二回目にお会いしたのは、亡くなられる二三年前、言語学関係の雑誌の依頼で、博士にインタビュ―した時だった。博士は、言葉に

興味をもったきつかけが、限りない愛着をもつ盛岡方言にあったと話されながら、例えば一般的に言われている「おぢやもず(お茶餅)」は、元々「うぢやもず(うちわ餅)」であって、相撲の行司の軍配形の団扇を模したのだからだ、と言つて、あんなおいしい食べ物はないと目を細めておられた。

石川啄木が「ふるさとの訛りなつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」とうたい、宮沢賢治が「永訣の朝」で、愛する妹の初期の言葉を「あめゆじゆとてちてけんぢや(みぞれ雪を取ってきてください)」という方言に凝縮させたのも、彼らの心の真実は、方言によって表現される世界と重なり合っていたのではないかと思う。長岡輝子さんが「雨ニモマケズ」の詩を方言的に詠むように、啄木の「本を買いたし本を買いたしとあてつけのつもりではなけれど妻に言ひてみる」を盛岡方言で口ずさんでみると、その自然な気持ちの流れが心に通じてくるのは私だけだろうか。そう言えば、金田一京助博士の

後にも言語学者が出ている。盛岡市志家町出身で盛岡中学大正九年卒の橋正一氏は、早く、全国的な視点からの日本方言区画論を発表し注目された。現在、方言アクセント研究では日本有数の東大教授上野善道氏は、盛岡一高昭和四十年卒で雫石町出身である。私も方

受験番号

戸澤 聰

それは余りにもショックな日であった。いくら目をこらして見ても、自分の番号が無い。当然、家にも帰りたくないし、何も考えられない。そんな訳は無いと思いつながら学校から岩大農学部の方へ歩き、高松の池に行っていた。

昭和三十七年三月、今は無い旧白聖の木造校舎が健在であった頃の事である。しかし冷静に考えて見ると、入学出来なくても当たり前前である。試験の前日に父親と口論し、薄着のままセーターも着ないで雪道の中を下駄でほつつき歩き、その当日は四十度の高熱で試験を受けられる状態では無かった。その翌年、運良くも合格し、入学が許可された。入学してみると予

言研究者の末席にいる。

本堂 寛(ほんどう ひろし)

現在 青山学院大学文学部教授
昭和二十六年 岩手県立盛岡一高卒
昭和三十四年 盛岡一高教諭
昭和五十二年 岩手大学教育学部教授
昭和五十四年 ブラジルサンパウロ大学
文学部客員教授(併任)
昭和五十七年 文部省初等中等教育局教科
調査官

備校時代の顔ぶれがかなり居た。

入学時の点数は、かなり良かったはずである。しかしながら、入られたクラスが悪かった。岩手日報テストで上位の連中がぞろぞろ居て、名前と顔を見比べたものである。卒業後に判明した事であるが、そのクラスは、全くの実験クラスで成績順にクラス編成したそうである。

入学した事を祝う間も無く、入校時テスト、五月十三日の運動会に向けての応援歌練習、土人踊りの練習が毎日行われ、同じ年令の二年生が仕切っている事に、十六才の心には大きな齟齬が残って居た。しかしながら、硬式テニス部という新しいクラブを見つけ、その部員として楽しむ事が出来、仙台で行われた、東北大会に出場出来

た事は自分史の中に書き留めておきたい。そんな中で社会は騒然とし始め、日米安保騒動、岸首相訪米阻止闘争が起きていた。当然にして、自分の気持ちは東京の大学へ向いていた。しかし家庭事情を考えるとそんな事が許される訳は無い。それでも母親は五千円の受験料を自分の内職代から出してくれた。そして合格、上京。それが結果として、盛岡、家族との別離であった。しかし離れようとすればする程、盛岡の事が気になる。そして自分を育ててくれた自然、岩手山、中津川、米内川、岩山、愛宕山、などが懐かしく思い出される。そんな折に、在京白聖会の存在を知ったのである。それから二十六年有年、場所は上野から原宿へと変わったが、大東京の中で盛岡を感じられる所、旧制盛岡中学、盛岡一高の卒業生が集える所、それが在京白聖会なのである。在京白聖四〇会が、今年は年度幹事として、会の運営を担当します。

大東京の真中で盛岡一高の校歌、応援歌を先輩、後輩達と一緒に歌える事を本当に楽しみにしています。

(昭和四十年卒)

在京白聖会年次幹事名簿

| | | | | | |
|-----------|-------|-------|--------|-------|-------|
| 昭和12年卒 | 東根 正志 | 佐藤 吉平 | 昭和40年卒 | 谷藤 典昭 | 戸澤 聰 |
| 昭和13年卒 | 佐藤小太郎 | | 昭和41年卒 | 畠 順一郎 | 白石源次郎 |
| 昭和14年卒 | 墓目 義元 | 手塚 光郎 | 昭和42年卒 | 船越 巧子 | 山田 武秋 |
| 昭和15年卒 | 坂水 孝 | | 昭和43年卒 | 小川 英三 | 星野 健秀 |
| 昭和16年卒 | 藤巻禧四郎 | 阿部 文弥 | 昭和44年卒 | 伊瀬 直子 | 片山 卓朗 |
| 昭和17年卒 | 小錦 恭一 | 中村 市助 | 昭和45年卒 | 岩澤 新治 | 加藤 文也 |
| 昭和18年卒 | 荒木田和世 | 八重畑達男 | 昭和47年卒 | 及川 義明 | 川辺 昌志 |
| 昭和19年卒 | 石塚 恒彦 | 小田島雅三 | 昭和48年卒 | 岩瀬佐千世 | 戸田 純 |
| 昭和20年卒(A) | 國安 輝久 | 晴山 節男 | 昭和49年卒 | 谷地 孝 | 関 勝夫 |
| 卒(B) | 太田 愛人 | 萬 藤五郎 | 昭和50年卒 | 佐藤 法雄 | 松坂 裕希 |
| 昭和22年卒 | 小川 達男 | 鎌田 潤一 | 昭和53年卒 | 浅利富貴子 | |
| 昭和24年卒 | 佐々木則雄 | 中村 肇宏 | 昭和54年卒 | 日向 裕司 | 吉田 浩之 |
| 昭和25年卒 | 及川 昭伍 | 藤沢 大久 | 昭和56年卒 | 小原 公一 | |
| 昭和26年卒 | 大平 洋司 | 切田 義憲 | 昭和57年卒 | 福田 和文 | 村上 秀哉 |
| 昭和27年卒 | 浅沼 栄一 | 藤原 禎助 | 昭和58年卒 | 熊谷伊久雄 | |
| 昭和28年卒 | 小田島雅也 | 菊池 勉 | 昭和59年卒 | 村上 太 | |
| 昭和29年卒 | 興津 維信 | 小林騏一郎 | 昭和60年卒 | 巖岩 玲子 | 及川 孝信 |
| 昭和30年卒 | 香村 央子 | 丸岡 寛行 | 昭和61年卒 | | |
| 昭和31年卒 | 松尾 忠良 | | 昭和62年卒 | | |
| 昭和32年卒 | 外山 浩子 | | 平成元年卒 | | |
| 昭和33年卒 | 綾部祥一郎 | 湯浅 正 | 平成2年卒 | | |
| 昭和34年卒 | 田村 捷利 | 細越 峻 | 平成3年卒 | | |
| 昭和35年卒 | 太田 敏 | 中川原宏治 | 平成4年卒 | | |
| 昭和36年卒 | 間瀬 隆男 | 村田 順一 | 平成5年卒 | | |
| 昭和37年卒 | 佐々木正身 | 春山攻一郎 | 平成6年卒 | | |
| 昭和38年卒 | 坂井 興一 | 吉田 昌弘 | 平成7年卒 | | |
| 昭和39年卒 | 神 啓子 | 田野 成智 | 平成8年卒 | | |

在京白聖会に参加して

裴岩玲子(昭和六十年卒)

思い起こせば、在京白聖会の存在を知ったのはちょうど一年前のことだったと記憶しています。どこかで誰かが開催しているのだろうなあとは思っていました、ふとしたきっかけでその存在を知ることになり、気付いてみれば若手(?)の「白聖百の会」の会長をさせていただくことになってい

ました。何年前のこと、分厚い白聖名簿をパラパラ見ていた実家の母が、「あなたの会社にも随分一高の卒業生がいるわよ。一度集まってみたらおもしろいのに。」と冗談半分で言っていたことがありました。社内には各大学のOB会は多数存在するのですが、さすがに高校のOB会はありません。自分の会社だけではなく、他の方面で活躍する卒業生に会ってみたい、と思っていたところに在京白聖会のお誘い。「これは絶対出なくちゃ。」と即座に思いました。案の定、色々な分野で活躍する、何世代にもわたる先輩方とお会いすることがで

きました。生まれ育った土地を離れ、東京砂漠に暮らすサラリーマンの一人として、こんなに心強いと思ったことはありません。私は仕事から初対面の方とお会いする機会が多いのですが、出身を聞かれ、「岩手の盛岡です。」(残念ながら「盛岡」だけでは通じないです)と答えたときの、相手の驚き。「なんでそんな遠くから働きに来てるの?」なのか、「岩手ってどこ?」なのか、「うわあ、田舎モン!」なのか、とにかくとても驚かれ、そしてちよつと寂しくなります。きつと私と同じ思いをしている卒業生は多いはず。同級生や先輩に声をかけたところ、二つ返事で仲間が集まるではないですか。五月十三日の大総会には多数の同輩が集まりました。直前の増員のため急遽会場を二つに分けることとなり、幹事の方々には大変ご迷惑をおかけしました。しかしながら、今まで集まることのなかった二十代が東京で一堂に会し、先輩と顔を合わせることができたこと



題字揮毫
天籟書道会主宰 浅沼一道氏(昭和三十七年卒)

プロフィール
昭和55年 盛岡一高「白聖高百年史」の題字を揮毫。
昭和63年 毎日書道会創立四十周年記念ヨーロッパ巡回展に代表出品。
平成5年 東郷神社「和楽殿」木標揮毫。
平成8年 中国西安臨潼の華清池に記念石碑を揮毫建立。
現在 在京 書宗院相談役、全日本書芸文化院常任運営総務。

は、貴重な経験になったと思えます。当日出席できなかった仲間からは、是非とも次回は…という熱いメッセージも届いています。美しい故郷を持つバンカラな卒業生同士、今後とも長くお付き合いさせていただけることを心からお祈りしております。



白聖の若い力!

青春白聖

「まんず、飲むべえ!」という故・工藤祐正先輩の心意気と、愛校精神によって産声をあげた在京白聖会も、諸先輩による喜怒哀楽の二十七年の歴史を刻み、本年より及川会長の下に新体制がスタートしました。本年の東郷神社での総会は、三百五十名参加の盛況でしたが、その陰には不参加ながらも会費を納めて頂いた多数の会員諸氏がおり、そのお心に対しても、会員相互の情報交換の場としての会報を出そうというところで発刊いたしました。

今後は、皆様の近況等も掲載して紙面を充実させたいと存じますので、ぜひご投稿をお願い致します。「在京白聖会よ永遠なれ!」の思いを込めて編集後記とします。

広報部長

春山攻一郎(昭和三十七年卒)